

校長ニューズレター(第21号・12月号) 宜野湾市立長田小学校校長:横山芳春



やさしいことを深く

わたしの好きな作家に、井上ひさしがいる。とくに小説が好きだ。「モッキンポット師の後始末」などは、ゲラゲラ笑いながら読んだ記憶がある。最も好きな小説は、「吉里吉里人」だ。それはさておき、かれの残した言葉に次のようなものがある。

むずかしいことを やさしく  
やさしいことを ふかく  
ふかいことを ゆかいに  
ゆかいなことを まじめに

「むずかしいことをやさしく」ということを、井上ひさしは常に心がけて、文章を書かれていた。難しいことを非常に平易に書かれた文章にはいつも敬服していた。これとは反対に、「やさしいことをむずかしく」ではいけない。世の中にはときたまこういう人もいるのだ。

「やさしいことをふかく」を、本校の授業で実践してくれた先生たちがいるので紹介しよう。

「雪」(三好達治)という詩の授業です。5年の先生たちによる去年の授業だ。

雪 三好達治

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。  
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

一見、やさしい詩だ。読めば、字面(じづら)の意味はすぐにわかる。これをどう深く味わっていくか。

先生たちは、つぎのような発問をしていった。

「屋根の形は」「雪は、今もふっているのか、止んでいるのか」「雪はどんな風にふっているか」「家と家はどれくらい離れているのか」「家の中に何が見えるか」「作者はどこから見ているか」「太郎と次郎は兄弟か」「太郎や次郎を眠らせたのは誰か」

このような発問にたいして、子どもたちは想像力をその都度、働かせながら自分のイメージで答えていっ

た。子どもの感想を紹介しよう。

「詩の授業では、ふしぎにおもったことをどんどん見つけて、かいつくしていったら、想像ができるようになったのでとてもすごいなと思いました。」(永山瑠華)

「かわしま先生の授業は、たのしくて、わかりやすく、イメージし、ぎもんをかいつくする。こうすると、太ろうと次ろうの家がみえたり、家の中はしーんとなっていて、とけいの音がきこえてくる。そのとき、詩の勉強は楽しいなと思いました。」(富村七星)

「雪という詩を川嶋先生がくばったときに、この詩が二行しかなかったの、これだけの詩だったんだと、びっくりしました。二行で、いろいろな、いけんや、ぎもんがいっぱいでした。人間は、いろいろ考える力があるんだなと思いました。」(花城彩夏)

このように子どもたちは、たった二行しかない詩がわたしたちにいろんなイメージを湧かせてくれたり、考えさせてくれることを理解しだしている。

授業を参観した先生たちの感想。

「二行しかない詩から、あんなにたくさんの疑問や感想が生まれることに驚いた。詩の世界観をそのまま見ることのできた素晴らしい授業だった。授業の題材によって、話し方や学級の雰囲気まで変えられる指導で、自身の授業にも取り入れていきたいと思う。」

「二行しかないはずの詩の授業で、こんなにも充実した授業ができるものかと、正直のところ驚きでした。教材研究の仕方がこれまでとは違う・・・。」

このように、先生たちもたった二行しかない一見やさしい詩教材をつかって、こどもたちに深く考えさせ、イメージさせていくことが授業で可能なことを、目の前でみている。

井上ひさしが言う、「やさしいことをふかく」ということを、子どもたちと先生たちが、授業のなかで創りあげた、素晴らしい実践をみることができた。